

# 印象主義とアナーキズム

——画家ピサロと批評家フェネオンの場合——

丹治 恆次郎

- 1 1894年のフランス
  - 2 カミーユ・ピサロ
  - 3 フェリクス・フェネオン
- あとがき

## 1 1894年のフランス

フランス語で *libertaire* という単語の意味を調べてみると、これは比較的新しくできた形容詞であることがわかる。いま私などが日常的につかっている辞書「プチ・ロベールⅠ」には、このフランス語の新単語は1890年にできたという記載がある。その意味は「社会的・政治的諸問題において個人の自由にたいするいかなる制限も許容せず容認しない」——という旨を表現する形容詞であり、これは名詞ともども *anarchiste* と同義語であると説明している。他方、*anarchisme* のほうは、政治用語としては1839年に初めて辞書に現れているということだ。

本稿では、この *libertaire* のような単語——日本語の辞書では絶対自由主義とか無政府主義と訳されている言葉——が生まれた時期、すなわちフランスの1890年代中頃に標的を絞って「社会的・政治的諸問題」と「個人の自由」との軋轢・相剋・闘争のありさまを主題としてとりあげようと思う。この僅か10年足らずの時期における数人の芸術家および批評家の存在と、社会・政治との関係が、いまは直接の課題となる。このような抽出の仕方は氷山の一角を見せるのみかも知れない。しかしこの時期の考察は重要である。なぜなら、私見によれば、政治的テロ行為が指導者のいない単独の個人によっておこなわれ、その行為の道義的判断はともかくとして「芸術家」が個人の自由を信じ、これを擁護したのは、この時期をもって一つの頂点をつくると考えるからである。

換言すれば、かりに政治史の観点だけから見ても、この時期の行動的アナーキズムは、まだ組織化されず、特定の党派をも形成していなかった。もちろん近代の産業化にともなう社会的現実の変化がもたらす矛盾の根は深かった。社会の底辺における悲惨な現実もあった。しかし、行動的アナーキズムは、集団による示威あるいは暴動というよりも、まず個人による反抗としてあらわれた。それは上位の指令にはよらず、いわば偶発的な外観をとった。90年代をすぎるとこれは鎮圧され、かつ党派化する。まず行為の有効性が問われる。政治行動の指導と組織化、これがこ

の世代以後の社会では第一の眼目となる。以後、党派の形成と政治行動は不可分なものとなっていく。ロシア革命を経てこの傾向は決定的なものとなる。20世紀においては、組織原理というのが必須となる。と同時に個人のアナーキズムは、この思想の性質上、必然的に地下に降り、潜在化していく。

したがって、この初期アナーキズムは堅固な政策をもつ政治理論ではなく、まず理念と心情との一体化としてあらわれた。——クロボトキンの『パンの奪取』の教理を信じ、のちに反ファシズムの闘士となったイタリアの著名なアナーキスト、エルリコ・マラテスタ（Errico Malatesta 1853-1932）の定義をあげよう。

「アナーキズムは社会的不正に対抗する道義的叛逆から生まれた。社会がつくる風土のなかで生活を余儀なくされ、他人の被っている苦痛を自分の苦痛として感じとっている人間、そしてその大部分の人間の苦悩が、やむをえぬ不可避の、苛酷な自然あるいは自然を越えた原因から来るのではなく、じつはその苦悩が社会的現実<sup>1)</sup>に由来しており、その社会的現実<sup>1)</sup>は、本来人間の意志に依存して人間の努力によって除去できる——こう知ったとき、アナーキズムへの道が開かれる。」

この「定義」に見られるとおり、個人的にも連带的にも「社会的不正に対抗する」この義憤——悲慘の自覚とその自覚に発する憤怒の行動化——とでも言うべきものが、初期のアナーキズムの性格を染める主調であったといえる。

この90年代の時期に起こった現実の出来事を、順を追ってたどって見よう。

1891年5月、クリッシー大通りのメーデーで、アナーキストのデモを騎馬警官隊が襲った。検事 Bulot はアナーキスト3人に死刑を求刑。裁判の後、検事宅にダイナマイトが投入される。この後、刑事犯＝爆弾魔として名だたるラヴァシヨル Ravachol が逮捕された。

1892年4月、ラヴァシヨルの裁判。「私の狙いは、テロ手段を用いて、苦しむ人々への労りを社会に強制することである」とラヴァシヨルは発言する。7月11日、ギロチンによる死刑の直前「アナキー万歳」と叫ぶ。この裁判の前日に、その給仕がラヴァシヨルを逮捕させた le restaurant Véry に投弾。主人と客1人が死亡する。アナキスト陣営は、レストランの名に掛けて、これを公正の検証・配剤 vérification と表現する。アナーキストの雑誌 L'Endehors が「獄中の同志たちの家族のために」つづった募金への賛同者のなかに、カミーユ・ピサロ、トリスタン・ベルナル、エミール・ヴェルハーレン、アンリ・ド・レニエ、フェリックス・フェネオン、ポール・シニャックなどの名前が見える。

1892年11月、カルモー鉱山会社の鉱夫のストライキを契機に、オペラ通りの事務所に爆弾が仕掛けられる。警官が包みを Bons-Enfants 通りの警察署へ持ち帰った瞬間に爆発。メッセンジャーボーイと5人の警官が死ぬ。この事件はパリ中をパニックにおとし入れる。じつはこの時の犯人は、批評家フェリックス・フェネオンの7歳年下の友人のエミール・アンリ Emile Henry であった。アンリな俊才であったが、Ecole Polytechnique（理工科学校）を途中で退学して坑夫になった人物である。徹底したアナーキストであった。フェネオンが後に執筆したアナーキスト誌の Almanach du Père Peinard de 1894 には、こう書かれている。「その魅力的なマルミット（ナベ料理・ダイナマイト）が、良き子供たちの街 la rue des Bons-Enfants で炸裂したのは1892年の11

月の、3日ではなくて8日のことだ<sup>2)</sup>。」

1893年の12月。こんどはヴァイアン Auguste Vaillant が下院の傍聴席から議員席に爆弾を投げた。死者はなかったが、ヴァイアンは逮捕され、翌日には、これに関連して、国際的アナキストの要員という容疑でアレキサンドル・コーエンが逮捕される。彼はユダヤ人であった（ドレフュス事件は翌年の12月に起こる）。コーエン逮捕の四日後に議会は緊急取締法を上程する。いわゆる「極悪法 lois scélérates」と後に呼ばれたものである。

このヴァイアンの投弾の当日の夜、書肆 La Plume 主催の夕食会があった。——ゾラ、ヴェルレーヌ、マラルメ、ロダン、ロラン・タイアードなどが出席していた。投弾の報知を聞いたとき、ロラン・タイアード Laurent Tailhade（1854-1919、タルブ出身の詩人批評家）はこう答えたという「行為が美しければ、犠牲者をもって瞑すべしか Qu'importe les victimes si le geste est beau?」。タイアードだけがその座を白けさせるような突飛な発言をしたとは思えない。このときは死者が出なかったこともあるが、漠然とながらアナキズムの雰囲気は参会者の全員に共有されていたと推察できる。

しかし、この6カ月間でアナキストの容疑者800人が逮捕された。各種の恩赦の請願が、時の大統領サディ・カルノーに殺到した。

1894年の2月、ヴァイアンの死刑。これもギロチンである。処刑の直前「ブルジョワ社会に死を。アナキー万歳」と叫んだ。やはり逮捕されたアナキスト、ジャン・グラヴが編集する『ラ・レヴォルト』はヴァイアンの最終陳述を掲載している。

その一節。

「わたしはいたるところを放浪したが、どこででも資本の重荷に喘いでいる不幸な人間を見た。南アメリカの奥地の、ほとんど人の住まない地域でも、資本の力のために傷口から血を流している人間がいる。わたしは、文明がうむ苦痛で疲労困憊している人間も本来はヤシの木陰で休息し、自然をゆっくりと眺めることができるのだと考えた。ほかの場所でも、資本の力がまるで吸血鬼のように不幸なパリアの血を最後の一滴までも吸い取ろうとしている。」<sup>3)</sup>

ヴァイアンの死刑の1週間後、さきに述べたエコール・ポリテクニック出身者のエミール・アンリがサン・ラザール駅に近いカフェへ時限爆弾を仕掛けた。これは無差別殺人である。だがアンリは「狂って」はいなかった。ビールを2杯、悠々と飲んだ後の確信犯的行動であった。彼はすぐにサン・ラザールの路上で逮捕される。友人の犯行によって容疑をうけたフェネオンも逮捕された。犯行幫助と爆発物隠匿の容疑である。

小説家・批評家のオクターヴ・ミルボーは、やはりアナキストの文筆をふるう文士であり、最初はラヴァシヨルを擁護していた。だが、この時から純粹アナキーと犯罪行為とを区別し、エミール・アンリを弾劾する記事を書く。フェネオンは沈黙していた。

エミール・アンリの爆弾のあと、類似の事件がつづく。4月4日、オデオン座の横、上院の前のレストラン「フォワヨ」へ時限爆弾が仕掛けられた。ロラン・タイアードが眼を負傷した。この事件にフェネオンは関係している。（半世紀の後に、これがフェネオンの単独行動であると判明した。）<sup>4)</sup>

さらに6月24日、フランス大統領サディ・カルノーがリヨンで刺殺される。イタリア人の20歳の青年カセリオによる単独行動であった。カセリオは大統領を歓迎する花束にナイフを隠して近

づいた。犯行直後の大統領夫人あての差出人不明の手紙には「復讐はなされた」と書かれ、ラヴァショールの写真が同封されていた。

共和国の大統領の暗殺を機に、アナーキストは魔女狩りのように猛烈に一斉検挙された。アンリは処刑された。8月には、いわゆる「三十人事件」の裁判があり、被告フェネオンには詩人マラルメが弁護側証言台に立つ。

以上が1894年の、とくに前半におけるアナーキスト・テロに関わるおおよその経緯である。事態は急激に展開した。実行と報復。諸事件はあたかも連鎖反応を起こしたかの観がある。しかしアナーキズムの発生には、それを必然たらしめる歴史とその土壌があった。そのことを確認するために、いま一人の「芸術家」の辿った道筋に注目したい。それがフランス印象派のなかの最長老、画家カミーユ・ピサロの行程である。

- 1) cit. J. U. Halperin, *Félix Fénéon, art et anarchie dans le Paris fin de siècle*, Yale University Press, 1988, Ed. française, Gallimard, 1991.
- 2) *ibid.*
- 3) *La Révolte*, du 20 au 27 janvier, 1894.
- 4) Joan U. Halperin, *Felix Fénéon*.

## 2 カミーユ・ピサロ

カミーユ・ピサロ（1830-1903）が生まれたのは、西太平洋アンティール諸島に属するサン・トマス島である。この島はデンマーク植民領であった。父はポルトガル出自のユダヤ人。ボルドーで育ったこの父親はカリブ海のデンマーク植民地で金物類や金属を手広くあつかう商人であった。母は原地に住むユダヤ系の出自であった。

カミーユは少年期にフリッツ・メルビエという旅行中のデンマークの画家と出会う。決断したカミーユはこの画家に同行してヴェネズエラへゆき、そこで3年間をすごした。おそらく彼の青春時代の決定的な時期であっただろう。ピサロはヴェネズエラで多くの習作を描いた。働く農夫、黒人労働者などである。

1855年に25歳でパリへ赴く。幼少期にパリを知ってはいたが、これは大きな決断であった。「わたしはすべてを棄てた」という言葉を、ピサロは以後よく口にした。

パリにおいてはじめて、デンマークの植民地生まれのユダヤ人画家は徐々に成熟してゆく。この都会以外の場所では、なんの手づるもない半異国人のこの画家の、このような道程はおそらく不可能であったろう。

ピサロは、とくにコローの作品に親炙した。彼の作品の基本的性格はコローによって与えられた。画壇の人間関係にも恵まれた。

1859年のサロンで、カミーユ・ピサロは初めて受け入れられた。それが『モンモランシーの風景』である。その2年後に彼は22歳のセザンヌを知る。この若い青年は友人のエミール・ゾラにピサロを紹介した。ピサロは、この南仏出身の不器用な青年画家に心をくばった。彼らは画架を

ならべてオヴェール・シュル・オワーズの同じ風景を描いたこともあった。後にはこの2人の画論が大きく異なっていたとはいえ、セザンヌは終生ピサロへの感謝を忘れなかった。

1865年にマネの『オランピア』の事件が起こった。ほとんどの新聞の美術批評がこの作品に「汚れたヴィーナス」「黄色い腹のオダリスク」「雌のゴリラ」を指摘し、マネと、マネに代表されると彼らが考える絵画傾向を徹底的に罵倒した。このフランス近代絵画史上で有名なスキャンダル事件は、ピサロの周囲の若い画家たちをマネの作品を支持することによって結集させた。批評界は混乱した。

このような時期において、ピサロの農本主義風のアナーキストとしての思考は、すでに醸成されていた。ピサロは、74年以後の、おなじ印象派のなかでも、モネやルノワールのような「舟遊び」や「舞踏会」や「ブランコの情景」つまり当時のブルジョワジーの遊興の図をけっして描かなかった。ピサロが自分の絵画とするのは、つねに「農夫」がいる風景画だったのである。

じつは、ピサロがマネの『オランピア』を支持したことには、他の同類の若い画家たちの場合とはかなり異なった性格があった。この異国生まれのユダヤ人画家は、すでにこのとき、徹底した反教権主義者であり、確信的なアナーキストになっていた。しかもピサロのアナーキズムへの志向は終始一貫していた。これが旧印象派の同志たちとの齟齬を生んだ。やがて決定的な分裂が起こる。だが、ずっと後になって、批評家フェリックス・フェネオンがアナーキストとして逮捕された1890年半ばになっても、ピサロの態度はかわらなかった。単独テロが続発したこの時期に、60歳をこえたこの画家は、なおもアナーキストの出版物に関与し、彼らを支援した。

ピサロは『オランピア』のなかのマネの斬新な絵画技法よりも、むしろその技法を支えている思想に共感した。それは厳密にはマネの思想ではなくて、むしろピサロ自身の考えの投影であったといえる。

つまりこのピサロ自身の考えの在りかたが、一見すれば穏和な彼の画面を支えているのである。官展が讃える伝統的な美的対象や題材の物語性ではなくて、マネと同様に、旧来の絵画的意匠をはぎとり、ごく卑近な誰にでもわかる同時代の事物や風景のみを描きながら、彼は絵画の高貴性を追求したといえる。これがピサロ自身の印象主義であった。ピサロは、たとえば、当時権威筋の批評に好評であったラッファエリのリアリズムに見られるような、窮民の姿をことさら描かなかった。彼は絵画によるプロパガンダやメッセージの伝達を拒絶した。1891年5月にピサロは息子の版画家リュシアンに次のような手紙を書いている。

「マクシミリアン・リュスがわたしに問ってきた——もし望むなら、きみがわたしと一緒に、芸術家がアナーキーな状況の中で果たすべき役割と連帯のためにアナーキストの観念〔思想〕を作品で表現できるかどうかと。なんらかの観念をつうじて芸術家の制作の意味を表現し、絶対的自由を示すことで、あの資本家・追従者・投機家・商人どもの恐ろしい拘束を脱することができるかと。芸術が含んでいる観念には発展がある。美への愛、感覚の純粋さなどがある。——しかし、そういう発展などは不必要なのだ。それならばジョルジュ・ルコントが文章に書くであろう、観念〔思想〕だけが問題なのだから。エミール・プージェがやがて出版するアナーキストの雑誌にも載るであろう。われわれが日々よく考えていることが容易に原稿用紙に書けるかどうかは疑わしい。それほどまでに観念を表現することは困難なのだ。<sup>5)</sup>……」

そしてピサロは、この制作法を守ることに於いて頑なであった。妻のジュリーが、生活苦のために、ほかの画家たちのように、もっと人気のある画題や情景を扱ったらどうかと夫を非難しても、彼はそれをまったく受けつけなかった。

第1回の展覧会（1874年）以来、印象派の歴史は苦難の道りであった。第7回印象派展から四年間の空隙をへて、いまようやく第8回（1886年）が開かれようとしていた。このときの美術界の状況はまったく以前とは異なったものとなっていた。いま印象派展を開くということは、従来のこの流派を前提として考えた場合には、もはや不可能であった。だが最長老格のピサロは、全八回すべてに出品していた。このときピサロはその政治思想のために、旧印象派のほとんどすべての画家とは決裂していた。かつての愛弟子だったゴーガンにさえも、ピサロはカトリック教の退嬰的残滓をみとめた。

第8回の（つまりこれが最後となった）印象派展は、まったく新しい世代の出現となった。この若い世代には、技法においても理論においても、旧い印象派には見られない画期的なものがあつた。

しかし、ピサロ自身が、この新しい技法と理論を採りいれていた。このピサロに起こつた変化とは何であつたか。

かつての第1回展以来、忍耐づよく従来の印象派を導き、若い画家たちを教育し（セザンヌにもゴーガンにも彼は絵画技法を教えた）、そのつどの攻撃にたいしてこの流派を敢然と守つてきた老ピサロが、このとき28歳のジョルジュ・スーラの絵画理論に倣おうとしていた。周囲の多くの者の眼には、ピサロはあたかもこの若い新進画家の弟子のような姿に見えた。多くの旧い印象派の画家たちは、軽侮をこめてこの長老の姿を眺めた。

しかしピサロ自身の立場にたてば、このピサロの変化には充分な理由があつた。ピサロは、どうあつても従来の印象派を革新したいと考えていた。旧い印象派は、彼には「ロマン的だ」と思へた。ロマン的というのは、この場合は情緒的、時代の風潮に流される主観主義という意味である。もっと冷静で厳格な絵画手法が必要だとピサロは思った。そして、この変化には技法問題だけでなく、ピサロが内心に抱えるアナーキズムが深く関わつていた。

この展覧会でスーラは、大作『グランド・ジャット島の夏の日曜日』を出品していた。この『グランド・ジャット島』は完全に展覧会場を圧倒した。すべての美術批評が、この作品を中心として渦を巻いた。スーラの画面はその主題によってよりも、まずその技法によって観衆を驚かせた。

無数の微小な色の斑点によって、画面のなかの像は構成されている。その微細な色斑は、色彩論あるいは新しく出現した光学理論の教えるとおりに、基本原色をもととして画面の上にこまやかに配置され、それが一定の距離をおいて見ると固有の像をつくりだす。いわゆる点描主義である。

このような画面制作法には、これまでの印象派に見られたような、それぞれの画家の筆の癖とか、個性的タッチとか、偶発的な情感の発露などが一切ないのである。恣意的要素はすべて追放されている。曖昧な「主観性」を許さないこの科学主義の厳格さは、現代の眼では想像もできないほどの大きい衝撃を美術界にあたえた。

一つの批評が出現していた。批評言語の変貌である。それがフェリックス・フェネオンの批評

であった。フェネオンは1884年に《独立評論》を創設した人物である。彼はこの年にスーラの『アニエールの水浴』を「発見」したという。これが彼の美術観の基本的態度を決定した。「わたしはこの絵画の重要性を完全に理解した」と彼は書いている。

『グランド・ジャット島』の展覧会の直後には、フェネオンはこう書いた。

「ジョルジュ・スーラ氏が、まずこの新しい絵画の完全でシステマティックな範例を示した。彼の大画面『グランド・ジャット島』はどのような細部を調べても、それは単調で忍耐づよい色彩の斑点、つまりタピスリー〔つづれ織り〕である。しかし、ここでは画家の器用な腕前は無用なのであり「まやかし」は一切不可能なのだ。「見せどころ」の介入する余地はまったくない。——画家の手には伸びがないことは認めよう。しかし画家の眼は敏捷で、洞察力があり、熟練している。<sup>6)</sup>」

そしてフェネオンは、この新しい流派に「アナーキーな力」を読みとったのである。彼の考えでは、印象主義という絵画思想は最初から潜在的にアナーキーな要素を含んでいた。つまり印象主義は、原理的には一切の既存の表現上の慣習や秩序に従わない。その潜在的性質が、いまピサロ、スーラ、シニャックを含む一群の画家をつうじて一挙に開花した。フェネオンにとっては、それがこの新しい絵画の出現であった。フェネオンはそれを「新印象主義」とかディヴィジオニスム〔分描主義〕と名づけた。フェネオンの批評は、個人の内面の直感から発する「生の哲学」を一歩踏みこえた社会的地平を含み込む批評言語によって成りたっていた。

「この数年来、印象主義がもつアナーキーな力は、いまや若い画家たちによる決定的な作品の形となってあらわれている。これまでは人々は認めようとしなかったが、今後は若い画家たちがこういう作品をつくってゆくだろう——彼らはきわめて鋭い視覚と明晰な知性を持ち、すぐれた技法（色調の科学的分割）を使用し、色彩と線による構成を意識的に活用することに巧みである——これはスーラ氏とシニャック氏のことである。（中略）文学者もまた、たとえばギュスターヴ・カーン氏やポール・アダン氏などは、日常の混雑したリズムではなくその日常性を合理的な夢想到に置換する努力をし、精確で有効な表現手段を求めて新印象主義の作品のなかに彼ら自身の追究との類似性を認めている。ユイスマンス氏は認めないのだが、彼ら文学者たちは、ピサロ、シニャック、スーラ、デュボワ・ピエ、アングラン、そしてリュスについて語っている。」

あきらかにピサロは、アナーキスト・フェネオンがいうこの「軍団」に加わっていたのである。彼ら仲間同士のあいだでどのような美術論議がなされたか。また、どのような政治思想がそれと重なり合っていたか。おそらく彼らの論議や談話の言葉は、ピサロだけを除く初期の印象派の画家たちの言葉とはまったく異なっていたことだろう。ピサロは従来からの警戒心を解いて、彼自身の思想を腹藏なく語ったであろう。彼の画法のみでなく農本的アナーキズムの思想に連なる若い画家も輩出した。ちなみに最後に名を挙げられているマクシミリアン・リュスはピサロから親しく点描主義を学び、後にフェネオンと同時期にアナーキストの直接行動の容疑で逮捕された新印象派の画家であった。

- 5) *Correspondance de Camille Pissarro*, 3, 1891-1894, Editions. du Valhermeil, 1988 p. 73.  
 6) Félix Fénéon, *Oeuvres plus que complètes*, tome 1, par Joan U. Halperin, Librairie Droz, 1970.

### 3 フェリックス・フェネオン

フェリックス・フェネオンは1861年トリノにて出生。父はブルゴーニュ出身、母はスイス人であった。フランスで過ごされた幼年期の詳細は不明であるが、十分な古典教育をうけたことが推定される。

1881年にパリへ移り、試験をうけ軍事省へはいる。仕事は rédacteur（文書係）——これは、かつてユイスマンスが従事した「閑職」である。若いポール・ヴァレリーも一時この職を切望した。——フェネオンは以後13年間この勤務をつづけた。上司の言によれば「勤務成績には敏感、叱責にはさらに敏感。完璧な文書作成者。融和性は乏しい」とのことであった。

同僚にも詩人がいてフェネオンは早々とパリの文学的サークルに接近した。1883年に「自由評論 *La libre revue*」の編集者となり、コントと文学批評、美術批評をかく。1884年には「独立評論 *Revue indépendante*」を創設した。そして第1回の「アンデパンダン展 *Salon des artistes indépendants*」においてスーラの『アニエールの水浴図』を〈発見〉する。「わたしはこの絵画の重要性を完全に理解した」と彼は書く。

1885年、フェネオンは、象徴主義運動の中心部にはいる。マラルメの「火曜会」の初期の常連となる。翌年、ランボーの『イリュミナション』をギュスタヴ・カーンと協力して出版。ランボーを紹介する。旺盛な活躍がある。「独立評論」のほかに《*La vogue*》、《*Symboliste*》、《*L'art moderne*》にも執筆する。フェネオンは、ブリュッセルの《*L'art moderne*》のパリにおける代理編集者 *correspondant* でもあった。

1886年、スーラと新印象主義に関する評論をまとめて『1886年の新印象主義者』と題して発表。これがフェネオンの決定的な美術評論となる。

1891年、この年にスーラは死ぬ。彼の死後、フェネオンはギュスターヴ・カーン、マクシミリアン・リュス、ポール・シニャックとともにスーラの全作品の整理にあたる。

そして1892年以降、スーラの死とともに美術評論は乏しくなる。フェネオンはこの年、ますますアナキストの新聞に寄稿することが多くなる。

1894年4月26日、フェネオンは逮捕される。いわゆるアナキストの「三十人事件 *des Trente*」である。Mazas 刑務所に拘置される（画家のリュスも同じ。リュスの描いたフェネオンのデッサンがある。椅子に座ったまま手足を大きくひろげて伸びをしている。軍事省の役人とはとても思えない）。

警察の調書は、フェネオンを、すでに処刑されているエミール・アンリの友人であり実力行動の共犯者であると述べていた。フェネオンは友人のジャン・グラウヴやセバスチアン・フォールとともに告訴される。また、当時から *restaurant FOYOT* に爆弾を投げ込んだ一味としてフェネオンを名指す者もいた。

弁護側証人として出廷した8月8日のマラルメの言葉は次のようなものであった。



「私はフェリクス・フェネオンを知っています。彼はみなから好かれていて、私も共感をいただいています。なぜなら彼は温和で廉直、そしてとても繊細な精神の持ち主だからです。友人たちが集まって話し合う私の家の夜会で知り合いました。私も来客たちも、これまで誰ひとりとしてフェネオンが芸術以外のことを話しているのを聞いたことがありません。私は彼が自分の思想を表現するためには、どのような手段を使用するよりも文学において卓越することを知っています。この召喚に応じたのは彼にたいする私の気持ち——これはきわめて強いものですが——からというよりも、<sup>7)</sup> 真実へむかう関心からです。」

また、マラルメは4月にフェネオンが逮捕された直後にも、こう語ったのであった。

「彼の会話や生活の態度から、なに一つとして彼が直接的事実をもってプロパガンダを行う傾向は見られませんでした。（中略）爆薬ということをおっしゃるが、フェネオンにとって最高の爆薬は彼の文章です。フェネオンには文学以上に有効な武器を使えるとは思いません。フェネオン氏は完全な紳士でした。ぎこちないくらい端正で、握手をするときはじつに率直でした。私としてはたいそう彼に敬意を抱いていました。おそらく彼は、われわれのどんな僅かな事実をも咎めだてて歪曲する現在の時局の犠牲者でしょう。私自身も、そういった時局的精神の犠牲者でした。夜会での小さな講演のために尋問をうけました。クレマン氏〔刑事警察官〕が私の家へ来て尋問をしたのです。」

マラルメばかりではない。オクターヴ・ミルボーをはじめ多くの友人たちも、ほとんど同趣旨の発言をしている。彼らの友情の真摯さとフェネオンへの信頼感に偽りはない。またフェネオン自身も彼らの信頼をうけるに値した。日常の人間として、いや、会話をかわし、語り書く一人の文学者として、彼は周囲の信頼に値した。しかし、最新の実証的研究では、フェネオンはあきらかに直接行動に関与していた。彼は偽証をしたのである。これはいったい、どういうことであろうか。単なる保身なのか。それとも同志への連帯からか。この状況下ではやむをえないことなのか。だが、いずれにしてもフェネオンは、彼に深い信頼を寄せ、彼自身のほうも愛し尊敬している友を裏切ったのである。彼の内心には、おそらく測りがたい深淵が穿たれたことであろう。法廷での、時には冷笑を見せる端然とした紳士、細い山羊髭をはやしたフェネオンの冷厳な風貌の下には、この深淵の秘密と彼固有の絶望が隠されていた。美術評論の筆を、ほとんど中断したのは、この深淵の深さを思わせる。以後、彼は徹底した仮面紳士となる。だが、その政治思想は、潜在的には、驚くべき一貫性を帯びていた。アナーキストの実力行使については、彼はどのように考えていたか。裁判の数カ月後に語った言葉が、友人シニャックの日記に次のように書かれている。

「フェリックスはテヴノーに語った。アナーキストの直接行動は、ルクリュヤクロボトキンの冊子を20年間出版するよりも、プロパガンダにはるかに大きく寄与したと。フェリックスは様々な直接行動の論理を示した。ガロは証券取引所を攻撃し、ラヴァシヨルは裁判官邸と軍隊（ロボー兵営）を、ヴァイヤンは議会を、エミール・アンリは選挙民を、カセリオは権力の座の大統領を攻撃した。議員というものは選挙民によって選ばれ、強制的にその職務を遂行させられるのだ

から、それを選ぶ選挙民のほうが罪は大きい。その選挙民を攻撃したエミール・アンリの行動が、もともと〈アナキスト〉的な行動だと思う、と。<sup>8)</sup>

これは普通選挙と多数決を決定原理とする議会主義的代表民主制の否定に連なる。市民社会の「良識」を逆撫でする思考でもある。しかし、もう一步すすめて考えれば、その「良識」が間違っていることもありえる。「選挙民のほうが罪は大きい」こともありえる。これを問わないのが多数決原理である。真の良識 *le bon sens* は、この語の定義からして誤るはずがない。誤ればそれは *le bon sens* ではない。だが、そのボンサンスはどこにあるのか。人間の内心に潜んでいるだけなのか。社会の表面に出た「良識」は、もはや計量可能な、配分可能なものに成りかわっている。それは良識の擬態である。その良識は、ある統制を経れば、強力な、圧倒的な社会的擬制ともなりうる。それは潜在的なイデオロギーとなって、また別種の深淵を宿している。その現実にもスエスを入れる——フェネオンの「深淵」はこのような思考を内に含み込んでいる。おそらく、この種の思考は容易には外へは出ない。……これが、問題の1890年代に、一人の聡明な批評家が体験したことであった。法廷の場とはいえ、言語と内心とが背離したのである。しかし後年、ポール・ヴァレリーはフェネオンの人柄について、次のように語ったという。「フェネオンは私がこれまでに会った人の中でもっとも知的な人間の一人でした。フェネオンは、公正で、峻厳で、優しい人でした。Il est juste, impitoyable et doux。」<sup>9)</sup>——「三十人事件」の裁判における出廷とは、このような人間に起こった事件であった。

フェネオンは釈放されて以来、当然軍事省は解雇され《*Revue Blanche*》に編集事務顧問として専属する。エドガー・ポーの未発表書簡とか、いくつかの翻訳がある。だが、フェネオンは、論説は書かなかったが、ドレフュス裁判のため《*Revue blanche*》の総力をあげてゾラを支持する。

1900年、フェネオンは《*Revue blanche*》においてスーラの総特集をおこなう。

そして1903年、《*Revue blanche*》は廃刊される。フェネオンは『*フィガロ*』誌の一記者となり全般的記事をあつかう。この年にカミーユ・ピサロは死ぬ。ゴーガンもヒヴァ・オア島で死んでいる。

1905年ごろからフェネオンは《*Le Matin*》誌に雑報の類 *faits divers* を書き続ける。いわゆる「三行ニュース *nouvelles en trois lignes*」である。政治・社会面を含み、種々雑多な報道を三行の短文に切り詰める。よほどの才気がなければできないことであろう。あるいは、俊敏な、屈折した戯作者がなす所業であろうか。

その後、1906年にフェネオンは *Bernheim jeune* (画商) にはいり、1925年に至るまで現代美術の部門を担当する。彼は専門的な画商となったのである。フェネオンと契約して世に出た画家は、H. E. クロス、アルペール・マルケ、アンリ・マチス、ヴァン・ドンゲンなどがいる。

1909年から1925年にかけて画商を兼ねながらフェリックス・フェネオンは「シレーヌ出版社 *Editions de la Sirène*」をジャン・コクトーやブレイズ・サンドラールなどと共に設立しジェームズ・ジョイスの本《*Dedalus*》などを出版することもあった。しかし、もはや目立った著述活動はない。スーラの全作品のカタログ作成の準備に日々を費やしていたフェリックス・フェネオンは1944年、大戦の末期に死んだ。

- 7) Les interviews de Mallarmé, textes présentés et annotés par D. Schwartz, 1955, Ed., Ides et Calendes.
- 8) extraits du journal inédit de Paul Signac, 1894-1895, Gazettes des Beaux-Arts, juillet-septembre, 1949.
- 9) cit., in Joan U. Halperin.

### あとがき

畏友奥村功君が、このたび立命館大学を定年退職されるにあたり、その記念論集に友人として一文を書かせて戴いた。この蕪雑な拙文が、お祝いの花の一輪になっているかどうかは疑わしいのだが。

おもえば半世紀に近い交誼に恵まれている。その苦勞も、その病氣も、彼独特の洒脱さを消しはしなかった。私などの思いも及ばぬ勤勉さ（誠実）と、あの天衣無縫の高笑いの機知と快活さが、奥村君のなかに同居している。出遇いのたびごとに私はかならず、なんらかの刺戟や教示を受けてきた。大隱は朝市に隠るという。奥村君は、まさに飄々とした大隱の、関西版庶民版である。私などは、その蘊蓄の一端に触れるばかりであった。いくつかのフランス語の初級教本も合作したが、その着想も編集も大部分は奥村君の仕事であって、私はただお手伝いをしただけであった。奥村君は多くの仕事をしているが、1980年に、私との共編で『ゴッホの手紙』（白水社）というテキストを出した。このときも彼の研究の入念さは私を圧倒した。ついで奥村君が『ロートレックの手紙』を編集し、数年後にわたしが『ゴーガン・ゴッホ往復書簡』を出した。すなわち、この拙論に見られるようなフランス19世紀末期の美術や文化に私の関心が向かうことになったのも、奥村君との出遇いが一つの機縁になっている。

（関西学院大学教授・立命館大学非常勤講師）